課題名：【4-1804】世界自然遺産のための沖縄・奄美における森林生態系管理手法の開発
実施期間：2018～2021 年度
研究代表者：小高信彦
所属：国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所

重点課題　主：【重点課題 ⑫】生物多様性の保全とそれに資する科学的知見の充実に向けた研究・技術開発
副：【重点課題 ⑬】森・里・川・海のつながりの保全・再生と生態系サービスの持続的な利用に向けた研究・技術開発

本研究のキーワード：中琉球固有種、原生的老齢林、森林施業、自然再生、侵略的外来種

■研究の背景と目的

2021 年「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録が決定しました。遺産地域に生息する固有種の多くが絶滅危惧種であり、その保全を担保することは、世界自然遺産登録地域を適切に維持管理する条件として、そして生物多様性国家戦略上も重要です。本課題では、中琉球固有種の絶滅要因や重要な保全対策を明らかにし、科学的なデータに基づく世界自然遺産の森林生態系管理手法を研究開発することを目的としました。

■研究の内容

中琉球に分布する世界自然遺産の価値を代表する固有種の絶滅リスクを低減するため、以下の４つの研究を実施しました。１）中琉球固有種の保全対策の提案と順応的管理に関する研究、２）老齢林の絶滅危惧種ハビタットとしての評価とその機能の保全・回復のための研究、３）緩衝地帯や周辺地域の生態機能評価と森林の管理・再生に関する研究、４）中琉球の固有動物に与える外来哺乳類のインパクト評価と根絶・管理のための研究。

■研究成果及び環境政策等への貢献

遺産地域のなかでも、絶滅の恐れが最も高い哺乳類の 1 種であるオキナワトゲネズミの分布回復のための回廊を提案し、世界自然遺産再推薦のゾーニングに貢献しました。また、沖縄島北部やんばる地域の固有鳥類である、ヤンバルクイナ、ノグチゲラ、ホントウアカヒゲの保全のためには、侵略的外来種、フイリマングース対策が最も重要であること、将来の沖縄島全域からのマングース根絶に向けた準備が必要であることを提案しました。林業が行われている沖縄島北部では、遺産再推薦のゾーニングにより希少動植物の保護担保が大幅に強化され、適切な配慮を行なえば、現行の林業生産活動と共存できると考えられることを示しました。マングースが根絶目前の奄美大島や、森林率が低く、人の生活圏と遺産登録地が特に近接している徳之島において、ノネコについて研究を行い、人が餌を与えるネコが遺産登録地内で希少動物を捕食していることを明らかにしました。遺産地域の保全のためには、遺産登録地を囲む緩衝地帯や、人の生活圏である周辺管理地域における保全の取り組みが重要であることを示しました。